「**私の信仰生活」**

**星野浦男**

幼少の頃からのことを通しながら、証をします。

私の生まれは1934年（昭和9年）群馬県前橋市で、周囲を両毛三山と呼ばれる赤城、榛名、妙義山の裾野に囲まれた前橋市の西よりで、現在の前橋市は町村合併で、私の住んでいた当時の10倍位の大きさになっています。そして谷川岳を源流とした利根川と広瀬川の間の岩神町と言う所です、

私が忘れようしても忘れられない昔の記憶ですが、1945（昭和20年）8月15日正午の第2次世界大戦の敗戦を、当時の天皇陛下の玉音放送で聞き終戦を知りました。

　終戦の10日前の8月5日夜から6日朝方にかけて、Ｂ29爆撃機の攻撃を受け、前橋市の市街地の80％が焦土とかしました。爆撃の様子は、空襲警報で飛び起こされ自宅の裏に掘った簡単な防空壕に入りフトンをかぶっていましたが、Ｂ29の耳も裂けるような爆音の凄さ、無数の焼夷弾の落下音と機銃掃射音で、生きた心地がしませんでした。暫くして町の方を見ると、町全体が燃えていて空が真っ赤でした、父親から当分の間町には近づいては行けないと言われましたが、人伝に聞いた所、お寺等の庭には身元の確認の取れない人が山積みにされているとのことでした。終戦が10日早ければこのような惨事はさけられたと思われます。

話は次に進みます。私ですが1952年（昭和27年）4月群馬県立前橋工業高等学校機械科を卒業して、当時は就職難で、歌にもある、ああ上野駅の集団就職列車の話は、これから5年位後の話になります。私は友人の父親が東芝に勤務していた関係で、友人は東芝に入社し、私は友人の父親の紹介で川崎の中小企業に入職しました。住むところは与えられましたが、食事が自炊のため大変でした。母が当時食事券、これがあると食堂で雑炊を1杯食べられると、パン券（之が無いとパン1斤が買えない1人1日1回だけ買えます）を前橋の親戚及び知人から集めて送ってくれました。

　当時月末が近づくと食料を買うお金も無く、夕闇せまる多摩川土手を食事もせず歩いていた事を思い出します。とにかく、今思いだしても良く我慢して頑張ったと当時を思い出します。

　私の両親と兄は、前橋市にある救世軍の会員でした。母は常々「見ないで信じるものは幸いである」（ヨハネ29章29節）と、我らの救い主イエスキリストを信じて横浜の救世軍に行きなさいと言われました。当時の私の1人での生活を心配しての事と思います。その縁で救世軍の横浜小隊に入隊しました。３年間位救世軍の集会活動等に参加していましたが、その後の日本の高度成長期でとにかく早く製造装置を作れと、「月月火水木金金」と戦時下の歌にもありましたように、当時も土日の休日も無く、国内は北海道から九州までの工場と、海外では、中近東のサウジアラビアには1966年～1980年の間に通算6回、1回が半年から1年、さらにイラン及びイラク、南米エクアドル、アフリカナイジェリア等のプラントの建設現場を飛び周り、通算31年間、家庭のことも顧みず仕事一途の生活でした。その為救世軍の集会、活動等は出来なくなってしまいました。

　1985年社内移動で本社勤務になり、人並みに土曜日は半日出勤／日曜祝日は休めるようになりました。当時私の義弟に当たる故大井牧師から誘われ、彼が金沢区平潟町にありました聖星保育園内にありました聖路教会の牧師をしていた関係で、家内と共に通い始めました。この時に神様のお導きがあったと思います。

　大井牧師が関東学院定年退職後、金沢文庫教会に移りましたので、金沢文庫教会の礼拝に通うようになりました。

　大井牧師が生前、お兄さんバプテスマを受けましょうと再三言われましたが、大井牧師のあまりにも早い別れの為実現出来ませんでした。ボートで釣りに行こうとか、いっぱい楽しみを話しただけで、神様の身元に行ってしまいました。

　その後、2009年イースターに白根牧師、中山先生始め教会員皆さんに背中を押され、皆さんの多くの祈りに支えられて、家内と共にバプテスマを受けさせて戴き、心身共に満たされています。

今年私達夫婦は米寿を迎えますが、これからも森島牧師夫妻の導き、叉教会員の皆さんの助けを借りながら、神様を賛美し、我らの救い主、復活を通して生きておられるイエスキリストを信じて行きたいと思います。